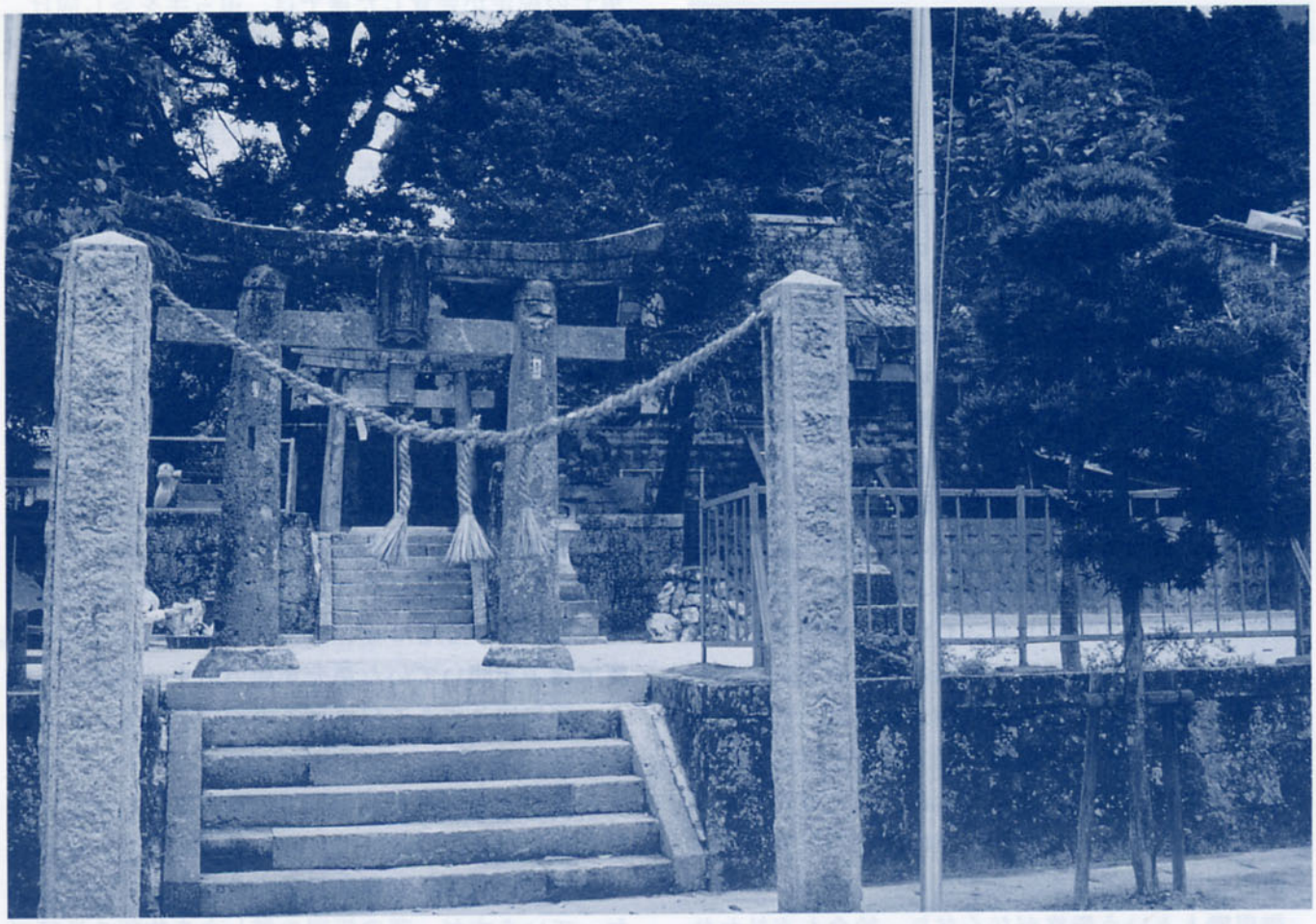
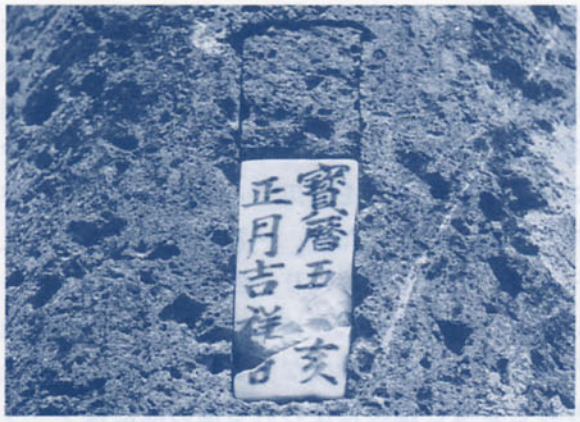


泉山辨財神社

—いづみやまべんざいじんじゃ—



泉山の辨財神社は、泉山区の氏神神社です。地区の人たちは、この辨財神社を親しみをこめて「べんじゃーさん」と呼び、毎月区内の班で当番を決め清掃をし、大切にお祠りしています。境内の鳥居には、呉須で「寶暦五□亥正月吉祥日」「奉寄進」と書かれた小さな陶板がはめ込まれています。8月9日はこの地区の祇園（夏祭り）で祝詞があげられ、踊ったり、歌ったり、にぎやかな夏祭りが行われます。お参りに来た人には御神酒がふるまわれます。

有田陶磁美術館に所蔵されている色絵狛犬は、かってこの辨財神社に奉納されていたという伝承もあります。

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報 No. 22

皿山の人物

副島　勇七

有田皿山で窯業に携わる者のうち、より優れた技術を持った者は、献上品を焼くために鍋島藩窯へ引き抜かれていきました。ここでの職人の生活は、高度な技術の漏洩を防ぐために、皿山よりさらに厳しい規制が強いられていたといわれます。たとえば、日常生活で必要なものは、藩窯の入り口まで届けさせ、番所詰めの役人たちが受け取り、中にいる者と外にいる者が接触できないようになっていました。

ここで生活する職人の中に、副島勇七という者がいました。彼は藩窯でも名うての名工で、本職の細工職のほか釉薬や絵の具の調合、絵付け、窯詰め、焼成にまで優れていました。しかし、藩窯での生活に不満を持ち、その態度は周囲の目にあまるものがありました。いっしょに働く職人たちは、このように生活できるのは藩主のおかげであると感謝し、決して勇七には同調しませんでした。勇七はたびたび謹慎を命ぜられましたが、ついに隣村の正力坊という所へ幽閉されてしまいます。

御用職人という資格がなくなり、給金も支払われなくなり、生活が逼迫(ひっぱく)した勇七は脱走を企てました。勇七の脱走が発覚した藩では、追っ手を差し向け、勇七の行方を探し求めます。勇七ほどの名工が藩外へ行けば、とたんに同じように優れた製品が出回り、藩の焼物の価値が下がってしまいます。勇七が砥部、九谷などを転々としたらしいことは分かっても、消息はいっこうにつかめませんでした。しかし、数年後、瀬戸焼のなかに有田とそっくりの図柄を見つけだし、伝え聞くうちに瀬戸で勇七らしい人物が見つかりました。

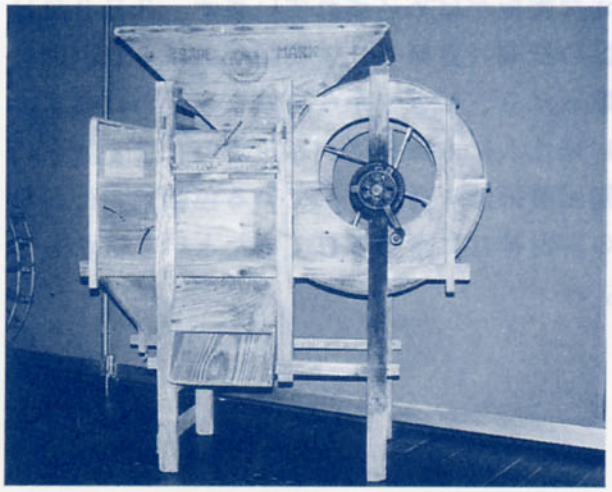
藩の役人・小林伝内は長崎の呉須売りに変装して勇七が潜伏しているらしい瀬戸の彖八窯へいき、主人に呉須を売ります。主人は良否の判別がつかないので、奥にいる勇七の所へ持っていきそれが唐呉須の良品であることがわかると、商談を進めようとします。ところが、伝内は奥で安物の呉須とすり替えたと言いがかりをつけ、大変ないい争いとなります。奥で様子を聞いていた勇七が思いあまって出てくると、顔見知りである伝内にその場でとりおさえられました。

佐賀へ護送された勇七は、佐賀郡嘉瀬の刑場で処刑され、伊万里の鼓峠でさらし首にされたといわれています。天明年間の御用職人の話として今日に伝わっていますが、藩の管理の厳しさを物語る逸話です。

（学芸員　知北　万里）

皿山の風物

稲作の一連の作業



米粒と籾殻を分別する道具「トウミ」

先号で、田植えの作業を紹介しましたので、今号ではその後に続く作業をご紹介します。昭和40年ころまでの話を聞き取ったものです。

田植えが終わると、7月と8月の2回、人糞などをまいて追肥をします。また、必要に応じてタノクサトリ、ガンヅメなどを使って、田に生える雑草を取り除いたり、稲の周りを耕します。

水田に引く水は溜め池の水を使い、この水の管理をする人は、フーツーサンと呼ばれました。フーツーサンは、溜め池の水を利用する農家の内の1軒が毎年持ちまわりでなったり、一番下流に田を持つ人がなったり、入札で決めたり、各地区で異なるようです。フーツーサンは天候によっていつでも溜め池の水門の調節をしなければなりませんでした。また、日照りのときなど臨時に使われる溜め池にはフーツーサンはいませんでした。

秋の彼岸ころになると、田の水を落します。そして、10月の半ばころになると早稲の稲刈りが始まり、通常の稲で11月ころ、遅くとも11月中に稲刈りは終了します。現在のように機械のない時代ですから、隣近所が人手を出し合って鎌で刈り取ります。大きな農家では、1日1升の米で人を雇うこともあったそうです。刈り取られた稲は田に直接おいて3日ほど干します。★

古窯跡 発掘調査

年木山は いずこ？

一　赤絵初り、伊万里東嶋徳左衛門申者、
長崎ニ而志いくわんと申唐人ゟ伝授仕候。
（中略）
某本年木山に罷居候節、相頼申故、右
赤絵付立申候へ共、能無御座候。
（後略）

酒井田柿右衛門家文書に伝わる赤絵始まりの「覚」の一節です。それによると、『伊万里の東嶋徳左衛門という者が長崎の「志いくわん（四官）」に赤絵技法を伝授され、酒井田喜三右衛門がもと年木山にいたころ、頼まれて赤絵付けを試してみたが、うまくいかなかった』とあります。そして、苦心して赤絵に成功したのが1647年ころのことのようです。

さて、酒井田喜三右衛門がいたという年木山とはいったいどこだったのでしょうか。それには大きく２つ説がありました。１つは南川原、そして、もう１つは泉山の年木谷周辺です。南川原と考えられた理由としては、南川原の柿右衛門窯跡の裏山が昔より年木山と呼ばれていたことや、明らかに柿右衛門家は南川原にいたころにも「年木山　酒井田柿右衛門」と名乗っていることなどが挙げられます。

年木谷３号窯近景

そして泉山の年木谷周辺と考えられた理由の前に「山」というものを考えてみましょう。有田でいう「山」とは地形的な山と窯場としての山と２通りの意味があります。例えば黒髪山と外尾山では山の意味が異なります。それでは年木山の「山」はどちらの意味なのでしょうか。承応２年（1653）の万御小物成方算用帳という文献には「有田皿屋」の内訳として14の窯場が記されています。「外尾山、黒仁田山（黒牟田山）、岩谷川内山、稗古場山、上白川山、中白川山、下白川山、大樽山、中樽山、小樽山、歳木山、板ノ川内山、日外山、南川原山」の14か所です。これを見てみますと、1653年ころには年木山は窯場として存在したようです。しかも南川原山とは別にあったことがわかります。どうも柿右衛門窯跡の裏山のことではなさそうです。

それでは話を元に戻して、泉山の年木谷周辺と考えられた理由について話を進めていきます。有田では寛永14年（1637）に窯場の整理統合が行われます。それ以降、内山中心の窯業圏が確立するのですが、その統合された範囲については「黒牟田、岩谷川内皿屋より上、年木山切り、上白川切り」と古文書には書かれています。これを内山の範囲に重ねてみましょう。岩谷川内は内山の西の玄関にあたります。江戸時代には口屋番所も置かれていました。上白川は札ノ辻から北に入り込んだ位置にあり、それ以上奥には窯場は存在しません。とすると年木山というのは内山の中でも東側に位置するのではないかという推定が可能になります。そして泉山は内山でも最も東に位置する窯場で、江戸時代には岩谷川内と同

★そして、千歯や足踏み機械で稲から籾を外す脱穀を行い、ムシロに広げて干し、トウスで籾をすり籾殻をとります。米粒と籾殻とはトウミにかけて分別します。こうして得た米を臼でついて糠を取り除くと白い米になるわけです。

雨が降る日や夜は、土間でムシロを織ったり、縄をなったりしたそうです。

稲作の一連の作業はここで終わりますが、稲を刈り取った後の田では、次の田植えを行うまで麦が作られます。　　（学芸員　知北　万里）

様に口屋番所が置かれていました。年木山の最有力候補と言えます。

そして、近年の発掘調査の結果もその推定を助ける内容でした。17世紀中ごろの泉山の窯場の一つである楠木谷窯跡では、色絵素地も多数出土し、染付製品にしても柿右衛門窯跡出土の製品と共通したものが出土しています。このことは柿右衛門家が泉山から南川原へ移ったことを想像させます。また、泉山口屋番所遺跡では17世紀中ごろの色絵製品も出土しました。出土状況から付近に赤絵窯の存在を匂わせます。

しかし、これらはいわゆる状況証拠でした。そして、今回の年木谷３号窯跡の発掘調査で出土した一枚のハマが、この問題に終止符を打つことになりました。年木谷３号窯は17世紀中ごろの窯で、ハマはその床下から出土しています。後世に混入したものではないことは明らかです。このハマには「年木山□左衛門　大明　右合七百三□」と呉須で書かれています。明らかに17世紀中ごろ、年木山は泉山にあったということです。

年木谷3号窯跡から出土したハマ。「年木山□左衛門　大明　右合七百三□」と書いてある。

楠木谷窯の操業年代の下限は1660年代ころです。そして、柿右衛門窯の操業が始まるのが1660年ころと推定されています。楠木谷窯と柿右衛門窯の共通性を考えると、廃窯を迎えた楠木谷窯などの陶工の一部が南川原に移った可能性が高く、柿右衛門家もその時南川原へ移ったと考えられます。

（有田町文化財調査員　　野上　建紀）

発掘れぽうと

お知らせ

有田町出土文化財管理センター落成

有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館と並んで、８月17日、有田町出土文化財管理センターが落成、開館しました。

これは、平成４年度・５年度の２か年継続事業で、国および県の補助金を受け、総工事費１億2167万円をかけて建設されたものです。このような施設が今年度中に、全国５か所に落成します。

現在有田町では、毎年３か所～４か所の発掘調査を行っています。これら古窯跡から出土した陶片類の収蔵には、これまでの収蔵施設ではスペースが足りず支障をきたしていました。今後は、他の施設に分散して収蔵していた資料を１か所で管理することができるようになり、ますます活用できるようになります。

白川の細流

梅雨が明ければ台風と、本格的な夏が来たのか来ないのか、実感がないまま秋がやってきたような気がします。今年の夏は雨音と蝉の声がいつも混じっていました。このあとは、月とすすきを楽しみたいと思います。

残暑がしばらく続くでしょう。お体には気をつけて…

（萬）

皿山びとの歌

有田町歴史民俗資料館報　　No.21

発行年月日 ＊ 平成５年９月１日

編集・発行 ＊ 有田町歴史民俗資料館

〒844 佐賀県西松浦郡有田町391番地

☎0955―43―2678